

平成 23 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」
C 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

() 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14,748 人 (295 校)	14,089 人 (285 校)	
中学校 2 年	13,981 人 (141 校)	13,801 人 (140 校)	13,915 人 (140 校)

(参考：全県 小学校 20,525 人, 382 校, 中学校 20,659 人, 187 校)

過去の参加状況

		国語	算数・数学	英語
平成 21 年度 C 調査	小学校 5 年	11,095 人 (239 校)	11,456 人 (240 校)	
	中学校 2 年	7,689 人 (98 校)	7,679 人 (98 校)	7,733 人 (99 校)
平成 22 年度 C 調査	小学校 5 年	14,545 人 (284 校)	14,541 人 (284 校)	
	中学校 2 年	11,367 人 (118 校)	11,525 人 (119 校)	11,393 人 (118 校)

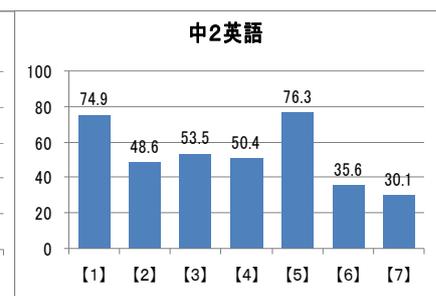
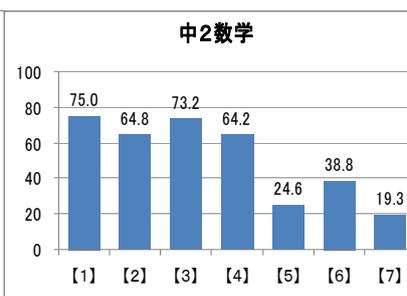
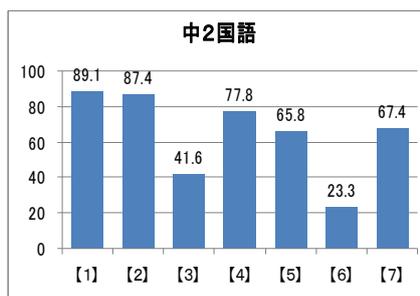
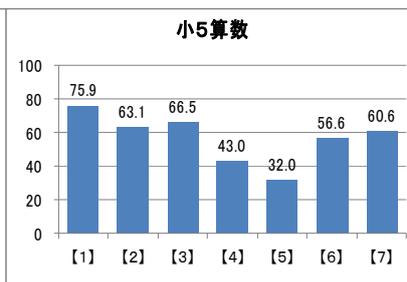
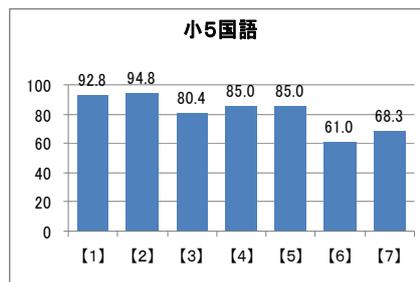
C 調査参加校数の経年変化

	参加校	参加率
平成 21 年度	339 校	58.7%
平成 22 年度	403 校	70.5%
平成 23 年度	436 校	76.6%

2 各問の正答率

(単位%)

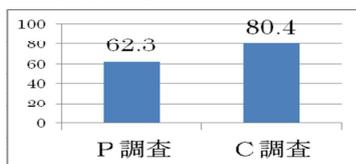
問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	全体
小学校 5 年	国語	92.8	94.8	80.4	85.0	85.0	61.0	68.3	81.1
	算数	75.9	63.1	66.5	43.0	32.0	56.6	60.6	56.8
中学校 2 年	国語	89.1	87.4	41.6	77.8	65.8	23.3	67.4	64.6
	数学	75.0	64.8	73.2	64.2	24.6	38.8	19.3	51.4
	英語	74.9	48.6	53.5	50.4	76.3	35.6	30.1	52.8



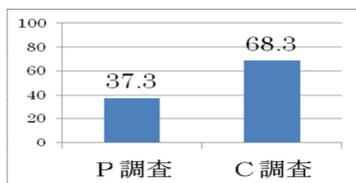
◇成果と◆課題の概要

(1) 国語

<小学校5年>

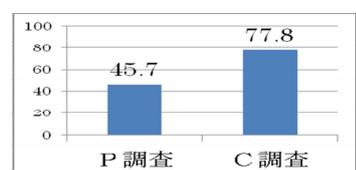


◇二文を一文に書き直す【3】はP調査より18.1ポイント上回った。相手に分かりやすく伝えるために文の構成を工夫する学習の機会を多くするなど、指導改善の様子が伺える。

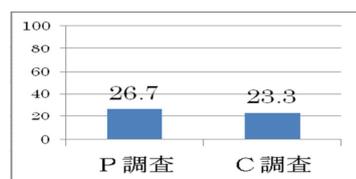


◇【7】は主張のために必要な情報を読み取って書き抜く問題で、P調査より31ポイント上回った。各領域で目的に応じて根拠を挙げて筋道を立て、内容を明確にしていく学習の成果が見られる。

<中学校2年>



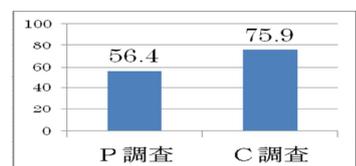
◇歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す【4】は、P調査より32.1ポイント上回った。音読等を通して古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりについての理解を促す指導に成果が見られる。



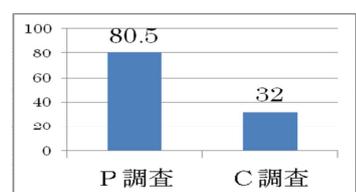
◆示された視点で資料を対応させて読み、理由付けにつながる事実を選び出して記述する【6】は、P調査類題よりも3.4ポイント下回り、継続して課題である。根拠を明確にして自分の考えを書き、そのまとめた考えを交流し合う学習場面をさらに増やすことが必要である。

(2) 算数・数学

<小学校5年>

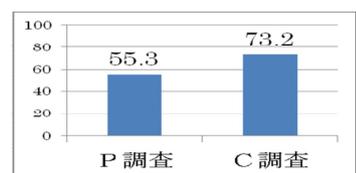


◇【1】の小数の加法はP調査より19.5ポイント上回った。数直線上で小数の位置や大きさを確かめる等、意味を理解し、計算の仕方を考える指導に成果が見られる。今後も意味理解を伴う指導を積み重ねたい。

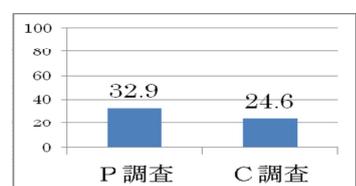


◆【5】(式 $6 \div 12$, 答0.5倍)は、何倍かを求める場合の除法の意味についての理解を確認する問題で、P調査(式 $12 \div 3$, 答4倍)より48.5ポイント下回った。「何倍」と聞かれると整数倍と考えて、 $12 \div 6$ をつくる誤答が多く見られた。数直線や線分図に数量を表して、基準量と比較量何かをはっきりさせ、 $6 \div 12 = 0.5$ を導き出していく学習活動が必要である。

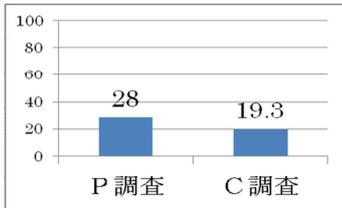
<中学校2年>



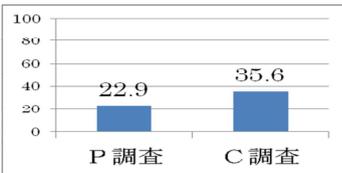
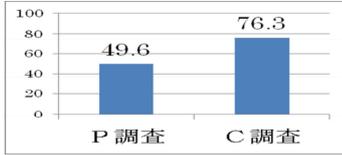
◇比例のグラフをかく【3】は、P調査より17.9ポイント上回った。表、式、グラフを関連付けながら関数の特徴を見いだしていく数学的活動を位置付けてきたことに成果が見られる。



◆見取図のない回転体の体積を求める【5】は、見取図のあったP調査よりも8.3ポイント下回った。直角三角形の1辺を軸に回転させたときの図形を円錐ととらえられないことが原因と考えられる。空間図形を実際につくりながら実感的に学んだり、「計算の過程」と「面が立体を構成する様子」とを関連付けてとらえさせたりするなどの工夫が必要である。



(3) 英語



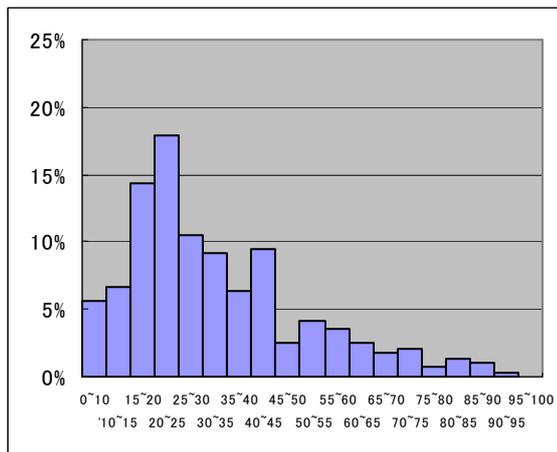
◆奇数と偶数の和が奇数になることを説明する【7】は、8.7ポイント下回った。文字式を用いて説明することに抵抗を感じている生徒が多い実態が読み取れる。 $2(m+n)+1$ と文字式を表したり、目的に応じて変形したりすることにとどまらず、式の意味を読み取り、それをもとに説明したり伝え合ったりする学習活動が必要である。

◇Yes-No 疑問文【5】はP調査より26.7ポイント上回った。主語を正確に見付け、代名詞で答える指導に成果が見られる。

◆wh-疑問文【6】はP調査より12.7ポイント上回ったが、40%を下回る正答率からして引き続き課題である。指定された語数や正しい語順で答えることができなかった。[主語+動詞]の語順を意識させて正しく答えることや、書いて文法の正しさを確認するような指導が必要である。

○学校による正答率の分布に特徴がある問題について（学校ごとの正答率の分布より）

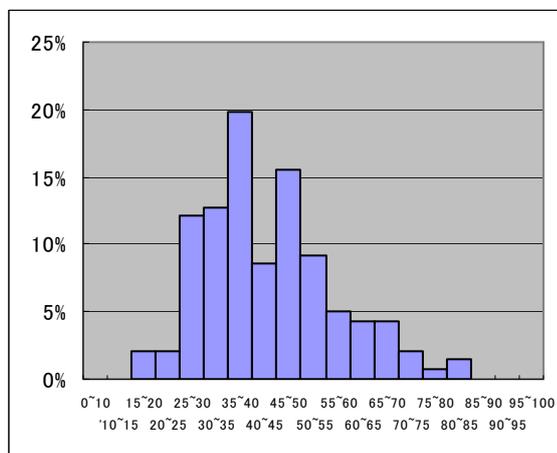
<小学校5年算数【5】> 正答率32.0%



「青色のテープの長さは6m、黄色のテープの長さは12mです。青色のテープの長さは、黄色のテープの長さの何倍ですか。式と答えを書きなさい。」

学校ごとの正答率は0%台~95%まで広い範囲でらばっている。学習指導に当たっては、誤答の「 $12 \div 6$ 」を生かして、何が基準量で、何が比較量なのかをとらえる場面を仕組み、式が「 $12 \div 6$ 」になるのはどんな場合なのかや、どんな問題になるのかに着目させ、児童一人一人が表現する活動を取り入れたい。このように意味をとらえる活動を通して、基準量と比較量が何かをはっきりとさせる指導改善を進めていきたい。

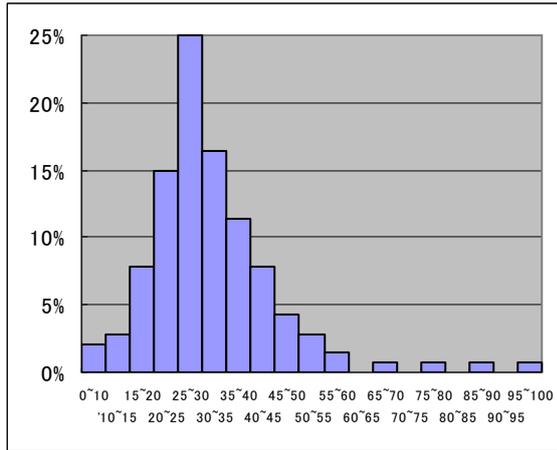
<中学校2年国語【3】> 正答率41.6%



主語・述語の対応関係が正しくない一文を、2つの文に適切に分けて表現しなさい。
「わたしたちは、校内駅伝大会優勝をめざし、毎日の練習に取り組んでいて、クラス全員の大きな目標です。」

学校ごとの正答率が15~85%の範囲でらばっており、平均値の階級の割合が低く、2こぶ状態となっている。文章の推敲の学習過程で、単に文章を修正するだけでなく、なぜ修正するのかという理由を明確に意識しながら、自分で読み返したり、グループで読み合ったりする学習活動につなげていきたい。

< 中学校2年英語【7】 > 正答率 30.1%



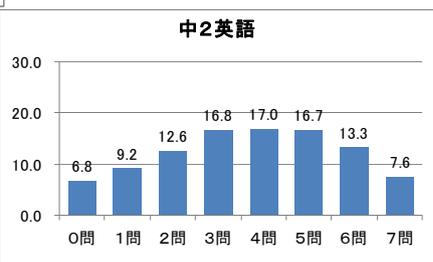
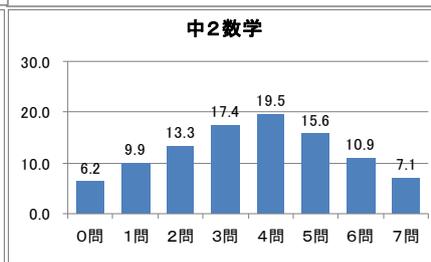
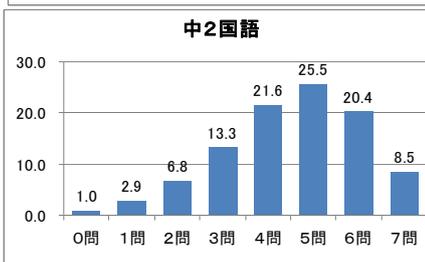
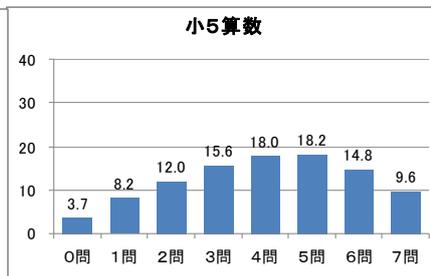
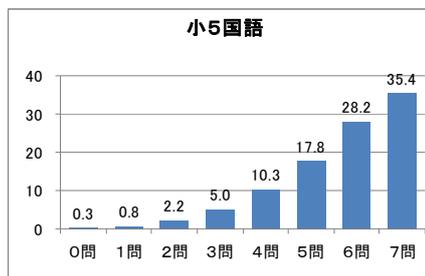
あなたが先週したことを1つ取り上げ英語で1文書き、そのことについてのあなたの考えや気持ちをさらに英文で1文書き加えなさい。
例：I played tennis. I like it very much.

学校ごとの正答率が平均値よりも低い階級にピークがあり、40%を超える正答率は約2割となっている。書くことへの抵抗感を少なくするような場面設定の工夫や、文法や綴りなどの文の正確さに着目させながら、正しい文を書く指導の充実を図りたい。

3 正答数の分布

(単位%)

正解数		0問	1問	2問	3問	4問	5問	6問	全問
小学校 5年	国語	0.3	0.8	2.2	5.0	10.3	17.8	28.2	35.4
	算数	3.7	8.2	12.0	15.6	18.0	18.2	14.8	9.6
中学校 2年	国語	1.0	2.9	6.8	13.3	21.6	25.5	20.4	8.5
	数学	6.2	9.9	13.3	17.4	19.5	15.6	10.9	7.1
	英語	6.8	9.2	12.6	16.8	17.0	16.7	13.3	7.6



小学校国語では右寄り、小学校算数と中学校国語がやや右寄りの分布となった。また、中学校数学と英語では、ほぼ左右対称の分布となった。P調査と比べ右寄りになったのは国語の漢字や算数・数学の数の計算や関数のグラフなどについて各校の取組で定着が進んでいることが影響したと考えられる。

正答数が0問の児童・生徒の割合が、P調査結果と比べると、小学校国語では3.3%→0.3%、小学校算数では4.1%→3.7%、中学校国語では26.9%→1.0%、中学校数学では9.2%→6.2%、中学校英語では11.9%→6.8%とどの教科も減っている。P調査の分析から課題意識をもった学校が、指導改善の取組をしている成果が出てきていると考えられる。

各学校では、問題ごとの正答率や教科ごとの正答数について、県から配付された分析シートに自校のデータを入力することで、県の分布と自校の分布を比較して検証し、対応策を考えていきたい。

◆各教科の正答率に対する分析及び学習指導に当たって◆

(過去の正答率や指導の具体については、解説・指導シートを参照)

【国語】<小学校5年>

1 各問の正答率について

- ・【1】，【2】は，日常生活で使用頻度が高かったり，使用範囲が広がったりすることが予想される漢字を出題した。指導改善の取組について成果が見られるが，引き続き次の2点に留意した指導を継続したい。

◇教室の言語環境に気を配り，学習した漢字を日常生活の中で意識して使うようにすること。

◇練習帳の空欄に繰り返し書かせるだけでなく，「意味を書くようにする」「熟語を集めるようにする」「短文を作るようにする」など，多様な家庭学習の出し方を工夫すること。

- ・【3】は，二文を一文に書き直す問題であるが，正答率は80.4%で，P調査より18.1ポイント上回っている。文の中での語句の係り方や照応の仕方に気付き，いろいろな形で文を構成する指導に成果が見られる。引き続き，接続語の種類と働きを確認し，文と文がどんな関係になっているかを学習する機会や，文の構成を工夫して，同じ意味を表すにもいろいろな書き方があることを学習する機会を大切にしたい。
- ・【4】は，文章の内容を的確に読むことができるかどうかをみる問題であるが，正答率は85.0%で，P調査を10.5ポイント上回っている。目的に応じて情報を選び出し，まとめる力をつける指導について成果が見られる。
- ・【5】は，新たに加えた問題であるが，正答率は85.0%で，音読等を通して古典に親しむようにする指導に成果が見られる。引き続き，作品を声に出すことで，古典作品の言葉のリズムを実感することができる指導を大切にしたい。
- ・【6】は，新たに加えた問題であるが，正答率は61.0%で，二つの考えを比較して共通点と相違点を明らかにする指導に課題が見られる。文のつながりを考えた表記ができないことも考えられるので，**目的に応じて文章の内容を要約したり，場面や状況に合わせて適切に表現したりする学習**を大切にしたい。
- ・【7】は，話合いの様子を表す資料を対応させて読み，主張のために必要な情報を読み取って書けるかどうかをみる問題である。正答率は68.3%で，P調査を31ポイント上回り，目的に応じて必要な情報を読み取ったり，いくつかの資料を対応させて読んだり，主張と関係付けて材料を選んだりする指導に成果が見られる。引き続き，各領域で**目的に応じて主張と関係付けて根拠を挙げたり理由づけをしたりする学習**を大切にしていきたい。

2 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては，**つける力を明確にして言語活動を決め出す**ことが求められる。その際に，子どもの興味関心を把握した上で，必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくことを通して，どの児童にも相手や目的，場面や状況に応じた言語能力がつくようにする。
- ・「書くこと」の指導では，**目的に応じ自分の考えが明確になるよう文章の構成を考える学習展開**を工夫する。また，接続語や指示語に着目し，論理の展開を整える学習の充実を図る。
- ・「読むこと」の指導では，**目的や意図に応じて，文書の内容を的確にとらえ，理由や根拠となっている内容，構成の仕方，巧みな叙述などについて注意する力を高める学習**の充実を図る。
- ・「漢字に関する指導」においては，実際に文の中で使われているものを取り上げ，子どもが字を覚えたり使ったりする楽しさを味わえるようにする。また，日々の漢字練習の仕方やテストのやり方については，**家庭学習との関連を図る**などの工夫をする。

【国語】＜中学校 2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】，【2】は、漢語を中心として書き言葉に使用する言い回しの語彙を出題した。指導改善の取組について成果が見られるが、引き続き次の2点に留意した指導を継続したい。

◇抽象的な語や、書き言葉に使用する語、四字熟語などについて、他の言葉と関係付けたり、実際に使ったりする学習場面を大切にすること。

◇練習帳の空欄に繰り返し書かせるだけでなく、「意味を書くようにする」「熟語を集めるようにする」「短文を作るようにする」など、多様な家庭学習の出し方を工夫すること。

- ・【3】は、一文を二文に分けて表現する問題であるが、正答率は41.6%で、P調査より6.2ポイント上回っている。しかし、依然6割近くの生徒が正解していない。書くことの学習過程で、必要に応じて随時立ち止まり、ペアやグループ、学級全体で検討したり見直したりしながら、**修正の観点を明確にして書き直していく学習場面**を大切にしたい。
- ・【4】は、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題であるが、正答率は77.8%で、P調査より32.1ポイント上回っている。音読等を通して古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりについての理解していくようにする指導に成果が見られる。引き続き、知識として学習するだけでなく、繰り返し音読することや暗唱、朗読することなどを通して、語のまとまりをとらえて、文語文を正しく読む力を身に付けさせたい。
- ・【5】は、叙述と叙述を関連付けながら読み、中心となる叙述について、作者の考えをつかむことができるかどうかをみる問題である。正答率は、65.8%であるが、3割を超える生徒が正解できていないことから目的をもって文章を読む力に課題が見られる。**目的をもって文章を読み、文章を読み取る視点を明確にして読む学習**を大切にしたい。
- ・【6】は、23.3%で、P調査類題よりやや下回っている。示された視点で資料を対応させて読み、理由付けにつながる事実を選び出して記述する力をつける指導に依然課題が残った。**キーワードに着目して部分を比較したり関係付けたりして読むことや、理由付けをする際に事実や根拠と、判断や理由との関係を明確にしながら考える学習**を大切にしたい。
- ・【7】は、【6】を踏まえて主張につながる理由付けをする問題であるが、正答率は67.4%である。平成22年度全国学力・学習状況調査の類題を上回っているが、依然3割を超える生徒が正解していないことから、事実や根拠から理由付ける力に課題が残った。根拠を基に自分の考えをまとめ交流し合う学習を通して、根拠となる事実や資料を関係付けて考えたり、理由を付けて考えを述べたりする学習場面を引き続き大切にしていきたい。

2 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては、**つける力を明確にして言語活動**を決め出すことが求められる。その際に、生徒の興味関心を把握した上で、必要感があり、追究の見通しがもてる学習課題を設定することを通して、つける力の確実な定着に結び付くように配慮する。
- ・「書くこと」の指導では、**学習過程を明確にした単元構想を図り、根拠や事実から理由付けをして自分の考えを書く活動**の充実を図る。
- ・「読むこと」の指導では、**いくつかの文章を、視点を明確にして比較するなどして、それぞれの文章の構成や展開、表現の特徴をつかむ学習の充実**を図る。
- ・漢字の家庭学習については、繰り返し練習だけのものとせず、例えば「四字熟語を集めて短文を作ってみよう」「新出漢字を使った熟語を集めよう」などの投げかけをし、生徒が**目的をもって取り組めるもの**になるようにする。

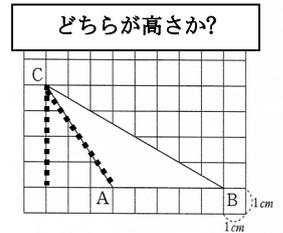
【算数・数学】＜小学校5年＞

1 各問の正答率について

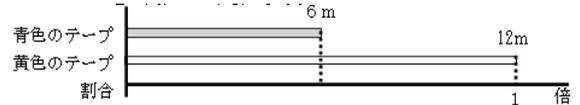
- ・【1】はP調査より上回り、75.9%になった。これは、数直線上で小数の位置や大きさを確かめたり、単位を付けることで日常生活に結び付けて考えたり、整数の計算に帰着させたりしながら、数の仕組みや意味を理解し、計算の仕方を考える指導が丁寧に行われてきた成果と考える。今後も意味理解を伴う指導を積み重ねたい。
- ・【2】はP調査より下回り、63.1%になった。減法と除法の組み合わせから加法と乗法の組み合わせに変わっただけで左から右の順に計算するという誤答が多くなっていることが予想される。**誤答を生かして計算のきまりを確認したり、具体的な場面と式の表現とを結び付けて考えたりする指導**を工夫する必要がある。

- ・【3】はP調査類題より上回り、66.5%になった。これは、**分数の意味や表し方の理解を基に、分数の形から大小関係を予想して説明できるように指導**してきた成果であるとする。今後も、**単位分数の幾つ分になるのか考える**など、分数の大きさに対する感覚を育てたい。

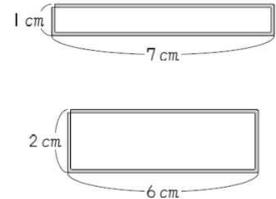
- ・【4】はC調査で新たに加えた問題で、平成21年度全国学力・学習状況調査の類題であり、43.0%になった。与えられた数値のCA=5cmを高さなのかどうか検討せずに使ったことによる誤答が予想される。面積を求めるために、**どの部分の長さが必要なのか考える算数的活動を通して、底辺と高さの関係を理解**することが十分でなかったという課題が残った。**三角形の面積を長方形に帰着させて考える指導**を大切にしたい。(→**指導シート参照**)



- ・【5】はP調査類題より下回り、32.0%になった。「何倍」だから整数倍ととらえたことによる誤答が考えられる。**基準量と比較量のとらえが十分でない**という課題が残った。**誤答の「12÷6」について検討したり、基準量を1と見て、比較量がいくつと考えばよいのか明らかにする算数的活動**を取り入れたりして指導することを再度確認したい。(→**指導シート参照**)



- ・【6】はC調査で新たに加えた問題で、56.6%になった。伴って変わる二つの数量を調べるときには、表からきまりを見付けるような学習がなされていると考えられるが、**実際の形や様子の変化と結びつけ、表を横に見て変化の規則性を見つけたり、表を縦に見て対応の規則性を見つけたり**できるような指導を一層充実させたい。



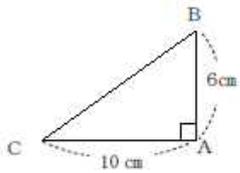
- ・【7】は平成19年度全国学力・学習状況調査の問題であり、60.6%になった。P調査【5】の類題でもあるが、図の中に全体の面積と部分の面積を見いだすことに課題が残った。**式と図を結び付け、式に対応するまとまりを図の中に見いだしたり、表現された図から式を導いたりする双方向の学習**を位置付けたい。なお、無解答が多い学校の場合の学習指導は、図から見いだした「6×10」や「5×3」の式の意味を書いてみることや、縦3m、横5mの長方形を花壇の中のどこに動かしても変わらないことを書いてみる場面を設けたい。

2 学習指導にあたって

- ・算数の学習指導を進めるに当たっては、一人一人の子どもに応じたきめ細やかな指導を行うことが大切である。特に、定着状況が不十分な子に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補足的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている子に対しては、それを基にしてより広げたり深めたりする発展的な学習に取り組める指導の工夫が求められる。**クリア・チャレンジ問題も活用**したい。
- ・**補足的な学習**では、繰り返し学習による補充だけでなく、**同じ場面を別の方法で確かめて学び直すものや、作業的・体験的な算数的活動を繰り返し行うことで意味理解を深める学習**を必要に応じて取り入れることも大切である。例えば、『式と計算の順じょ』の学習で、加法よりも乗法を先に計算するきまりを理解する際に、**具体的な問題の場面と結び付けて考えさせたり、加法と乗法を先にした場合の解の違いについて考え、それを言葉でまとめさせたり**することも考えられる。
- ・**発展的な学習**では、子どもが自ら取り組んでみたいと思えるような、知的なおもしろさを感じられる指導の工夫も必要である。例えば、『変わり方』の学習で、対応する関係を式に表すことが困難な場合について、2つの数量の関係を表に表して調べ、きまりを見付けることによって問題を解決し、学ぶことのおもしろさや楽しさを味わわせるようなことが考えられる。

【数学】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】は、正負の数の四則計算であり、正答率は、昨年度76.8%、本年度75.0%で、7割以上が続いており、安定した力がついてきている。これは、誤りのある計算について、誤答になる理由を考え、正しい計算方法との違いについて検討する場面を仕組むなど、指導の工夫が行われてきた成果だと考えられる。今後も、項を意識しながら計算の順序を確かめて正しい計算ができるように指導したい。
 - ・【2】は連立方程式を解く問題であり、平成21年度と同じ問題を出題した。正答率は、平成21年度が66.1%、本年度64.8%で、1.3ポイント下がった。連立方程式の指導では、途中の式を丁寧に書かせてその過程を振り返り、一元一次方程式に変形するときに加減法と代入法のどちらで処理しようとしたのかを確かめたり、その処理が適切かどうか検討したり、**計算結果を二元一次方程式に代入して解の妥当性を確認したりする指導**も大切にしたい。
 - ・【3】は、比例のグラフをかく問題であり、正答率は、昨年度71.6%、本年度73.2%で、1.6ポイント上昇した。各校において、 $y = -1/2x$ の-1/2が、表やグラフにどのように現れているか考えるなど、比例定数に着目し、**表、式、グラフを関連付けながら関数の特徴を見いだしていく数学的活動**を位置付けてきた成果が伺える。今後も継続して取り組みたい。
 - ・【4】方程式の解の意味についての問題である。正答率は64.2%であり、P調査の類題(正答率61.2%)同様、4割近い生徒が方程式の解の意味を理解していない。連立方程式の解の意味を理解するために、様々な数をそれぞれの方程式に代入し、表にまとめて解を探すなどの数学的活動を位置付けたい。
 - ・【5】は、円錐の体積を求める問題であり、正答率は平成22年度P調査、C調査では、それぞれ30.5%、25.4%、本年度のP調査では32.9%、今回は24.6%であった。見取図がイメージできず、回転体を円錐ととらえられないことが原因と考えられる。立体の構成や計量について、具体物を示したり実際に作ったりしながら実感的に学ぶ授業の工夫や、覚えた公式に数値をあてはめて体積を求めるだけでなく、**見取図をかかせたり、計算の過程と面が立体を構成する様子とを関連づけてとらえさせたりする**などの工夫が必要である。
- 
- ・【6】は、文字式の意味を読み取る問題であり、P調査の類題の正答率は28.0%で、今回は38.8%と上昇したものの、問題に提示されている【説明】の例のように、適切に図を囲みながら式の意味を説明できなかつたり、無解答であったりする生徒が多くいたことが予想される。文字式に抵抗を感じる生徒には、まず一辺に5個の基石を並べたときの $3 \times 5 - 3$ の意味を説明し、その後5を x に変えたときの説明を考えるよう助言するなどの手だてが必要である。また、互いの考えを説明し伝え合う数学的活動を通して、**結論まで正しく書くことの大切さを生徒が実感できるような授業を一層進めていく**必要がある。
 - ・【7】は、正答率が19.3%であった。具体的な事象について、文字式を用いて説明することに抵抗を感じている生徒が多い実態が読み取れる。まず、**事象を具体的にイメージできるように、具体的な数で考えながら、式に表したり、それらの表現を互いに見合い、そのよさを学び合ったりする経験をさせることが大切**である。また、**文字式を目的に応じて変形したり、その意味を読み取ったりして説明し伝え合う学習**を丁寧に行う必要がある。

2 学習指導に当たって

- ・定着状況が不十分な生徒に対しては、授業の定着場面における**見とどけ**を確実に行うことが大切である。また、繰り返し学習をしたり場面を変えて学習したりするなどの**補充的な学習**が必要である。
- ・補充的な学習では、例えば、数式領域では $25 - 5 \times (-4) = 5$ と計算してしまうのはどのような手続きをしたときか検討し、その手続きの妥当性を語り合った後に、留意することを意識してドリル学習をすることなどが考えられる。
- ・基礎・基本を身に付けている生徒に対しては、それをより広げたり深めたり進めたりするなどの**発展的な学習**に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。
- ・発展的な学習では、例えば、【6】の問題で、基石の並べ方を変えて、そのときの基石の数を式に表し互いの式を読み合う学習も考えられる。
- ・学習内容をより定着させるために、**クリア、チャレンジ問題の活用**も積極的にしていきたい。

【英語】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】P調査【2】の類題であり、正答率74.9%はP調査より同程度である。日常の授業の中で、[主語+動詞]の語順を意識させ口頭練習やコミュニケーションを図る活動が丁寧に行われていること、自己紹介などで[主語+be 動詞+going to+動詞の原形]や[tell+目的語]の表現を使った言語活動を充実させている成果と考える。**コミュニケーションの場面や働きを意識した言語活動の中で定着を図れるような指導の充実を図りたい。**
- ・【2】P調査【1】の類題であり、正答率48.6%はP調査より5ポイント下回った。前文までの内容と直前にあるbe動詞から現在進行形の文と判断できずに、三人称単数現在形や過去形にした誤答が多いことが考えられる。**be動詞と一般動詞の文構造や意味の違いが分かり、使い分けができるように説明した上で、口頭練習を継続して行ったり、コミュニケーションを図る活動を行ったりする**などして定着を図りたい。
- ・【3】新たに加えた問題であり、正答率は57.3%である。My sister (僕の姉)について説明している文のto be a doctor at collegeから、姉が大学生であることが読み取れずに、高校生と判断した誤答が考えられる。英文の内容を正確に読み取る力を高めるために、5W1Hなどを観点に概要を把握した上で、**大切な部分を的確に読み取る言語活動の充実**を図りたい。
- ・【4】昨年度C調査の類題であり、正答率50.4%は、昨年度より20ポイント下回った。土曜日を音声としてとらえていたが、ローマ字のようにSatadeyとした誤答が考えられる。**発音と綴りに**ついて日本語との違いに着目させ、**発音練習など継続的に行ったり、日常生活でよく用いられる曜日、月、数等については、授業の始め等で確認するなど指導の工夫**をしたりして、定着を図りたい。
- ・【5】P調査【3】の類題であり、正答率76.3%はP調査より26.7ポイント上回った。《Yes-No 疑問文》についての指導が丁寧に行われている成果であると考えられる。引き続き教科書本文の内容について《Yes-No 疑問文》の指導を行う中で、**主語を正確に見付け、代名詞で答える指導の継続**を図りたい。
- ・【6】P調査【4】の類題であり、正答率35.6%はP調査より12.7ポイント上回ったが正答率は低い。質問文から、姉の住んでいる場所がTokyoと判断したが、指定された語数や正しい語順で答えることができず、誤答や無回答になったと予想される。《wh-疑問文》について、**[主語+動詞]の語順を意識させて正しく答えることや書いて文法の正しさを確認するような指導を丁寧に行っていき**たい。
- ・【7】P調査【5】の類題である。正答率は30.1%であり、P調査より約15ポイント下回った。内容の上では理解できるが、文法的に間違っている誤答や無解答が予想される。生徒が書きたくなるような場面やモデル文などを提示して、**書くことへの抵抗感を少なくするような工夫や、文法や綴りなど文の正確さに着目させながら、正しい文を書く指導の充実**を図りたい。

【5】 Does Ken like swimming very much? Yes, he does.

【6】 Where does Ken's sister live? She lives in Tokyo.

2 学習指導にあたって

- ・一度扱った言語材料を授業で言語活動を通して**繰り返し位置付ける**など、既習事項を生徒全員に**確実に定着させる指導の工夫**を図りたい。例えば、be動詞を使った過去進行形の表現の学習場面では、これまでに学習した、現在進行形を使った表現を想起させ、**既習事項と新出事項とを比較できるような指導の工夫**を行う。
- ・コミュニケーションを図る活動では、**関心・意欲・態度を評価すると共に、文の正しさを意識して活動できるようにし、使った表現の正しさを振り返る場面の工夫**をしたい。
- ・授業で扱った本文の音読や書き取りなど、**生徒が取り組みやすい課題や、自ら表現するような発展的な課題**を与えるなど、**日常の授業と家庭学習をつなげた指導**を一層充実させたい。

4 家庭学習の時間

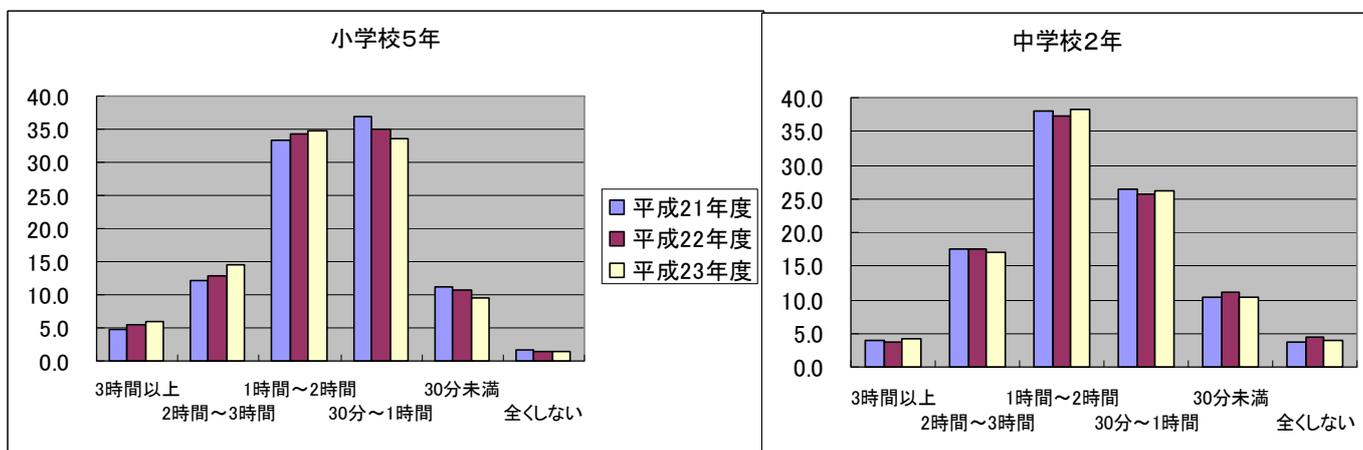
◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上, 3時間より少ない |
| 3 1時間以上, 2時間より少ない | 4 30分以上, 1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 全くしない |

(単位%)

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30分未満	全くしない
小学校5年	6.0	14.6	34.8	33.7	9.5	1.5
中学校2年	4.1	17.1	38.1	26.2	10.3	4.1

<平成21～23年度のC調査時の推移> (C調査：3年間とも11月第3週に実施)



小学校5年では、家庭学習時間が1時間以上である児童の割合が、21年度50.2%から、22年度52.8%、23年度55.4%と次第に増えている。これは、家庭学習の充実研修などを通して、見直しの機会をもったり、手引きを作成して活用したりするなど、家庭学習の充実に向けての動きが出ているものと読み取れる。

一方、中学校2年では、3年間の変化はあまりなく、1～2時間の家庭学習を行っている割合が最も高い。また、P調査結果と比べると、1時間以上の割合が63.3%→59.3%と4.0ポイント減少している。部活動や生徒会等により、学校外での学習時間の確保が難しいなどの実態も考えられ、生活時間の見直しをして、家庭学習ができるような時間的保障を模索するなど、学校としての課題意識をもって、各学校の実態に即した改善策を検討する必要がある。また、家庭学習の時間だけでなく、内容を充実させるために、より細かな実態調査を次回より行っていきたい。